

実業団チームとして長きにわたり強豪であり続けているパナソニックインパルス。
仕事とフットボールを両立しながら日本一を目指す現役選手たちは、何を学び、何を得ているのか。
そして、インパルスをどんなチームにしようと考えているのか。2020年度の幹部たちに、
インパルスの今、そして未来を語ってもらった。

デュアル・キャリアを貫いて 社会人スポーツの新たな基準を作る



副将OL72
柴田 純平

副将LB4
林 直輝

主将DL17
デイビッド・モトウ

副将WR22
木下 統之

皆さんの仕事内容とフットボールが業務に役立っていることを教えてください。

木下 私はハウジングシステム事業部で、住宅のポストや外壁・屋根など外回り設備の営業企画をしています。出張が多く移動時間が長いので、試合が近いときなどは業務終了後の移動時間を利用して、対戦相手の映像を見てプレーを研究するなど工夫しています。「体格がいいね」「首が太いね」ということからお客様との話が盛り上がり、「アメリカンフットボールの木下」と名前を覚えてもらっています。

モトウ 私は海外事業本部で外国籍社員の人材育成や、海外関連会社のサポートを担当しています。フットボールと仕事の両立には体力が必要で、最初は時間の管理にも苦労しましたが、自分が得意とする英語を使った仕事にとってもやりがいを感じています。

林 私は照明器具を扱うライティング事業部で、人員管理や配置転換など人事の仕事をしています。人事業務は採用や新人育成から、本人は想定していない異動の発令や職場のトラブル解決など、人と人との間に入って調整する仕事が大半を占めています。フットボールで培ったコミュニケーション能力やバランス感覚が、仕事の上でも生かされていると感じます。

柴田 私はエナジーシステム事業部のPSマーケティングセンターで、照明や空調、防犯などの設備機器を総合的に管理するビルオートメーションの営業企画を担当しています。営業部門と製造部門をつなぐハブ的な役割を担っているので商品の知識など覚えることがたくさんあり大変です。しかし、工場でものづくりをする人たち、商品を販売する人たちまで、幅広い分野の人たちと関われるのはこの仕事の面白いところです。

会社の中でインパルスはどのような存在として見られていますか？

柴田 私の部署では毎試合応援に来てくれます。皆さんが資金を出し合ってくれて私の名前が入った横断幕を作ってくれました。

木下 一緒に働いている仲間が応援してくれるのは何よりも励みになりますね。
モトウ 一方で厳しい目で見られていることも事実です。応援していただいているからこそ、フットボールを理由にした甘えは許されません。遅刻など業務に支障をきたすようなことがあつては大変なことになります。そこはみんな普段から意識して取り組んでいます。

林 良くも悪くも一人一人の働きぶりや人柄によってインパルスの印象が大きく左右されます。現在みなさんに応援していただいているインパルスは、先輩たちが築いてきたものでもあるので、私たちが築いていかなければと思っています。

会社はインパルスに対して何を期待していると思いますか？

木下 職場のみんなが、日本一になって欲しいと願ってくれていることが肌で感じます。

林 スポーツの明るいニュースを職場に届けることで、職場を活性化させるという役割があると思っています。普段一緒に仕事をしている僕たちがスポーツでも結果を出

昨年リニューアルされたウエイトトレーニングルームにて。週3回の練習日以外にも、選手たちは自分の業務のスケジュールにあわせて利用することができる

すことで、「私も頑張ろう」と思ってもらえたら嬉しいですね。

モトウ 「一流の選手である前に、一流の社会人であれ」。この精神がインパルスには脈々と受け継がれていて、実際にインパルスOBにはライオンリユニーションズ社の道浦正治社長をはじめ、引退後もビジネスパーソンとして活躍している方がたくさんいらっしゃいます。私もまずは社会人として活躍することを意識しています。

林 スポーツをやりながらでも、仕事でトップに上り詰めることができる。社長がインパルスOBというのは、仕事をする上で大きなモチベーションですね。

柴田 パナソニックLSEエンジニアリング株式会社の藤井和夫社長もインパルスOBで、仕事とフットボールを高いレベルで両立されていたお手本のような存在です。もともと中部エリアの営業部長をされていて、私が中部エリアの担当だったので食事に連れていってもらったこともあります。そういう場ではインパルスOBとして親し

みやすい雰囲気なのですが、仕事になるとバシッと変わる。メリハリを大事にされているからこそ、現在のポジションにいらっしゃるのだと思います。

仕事とフットボールの両立に取り組み、自分が成長したと思うことはありますか？

木下 入社1年目は正直、しんどかったです。まずは仕事に慣れなければなりませんし、人間関係に悩んだこともありました。必死に食らいついていく中で、人前で話すスキルなど少しずつ身につけていきましたし、メンタル面が鍛えられました。

フットボールも、WRならDBとの競り合いの場面などメンタルによって勝敗が左右される場面が多々あります。人前でプレゼンテーションする緊張感や苦手な仕事にも立ち向かう忍耐力など、仕事もフットボールのトレーニングにもなるなど2年目で気がつきました。それから仕事で困難に直面した時は、「これも選手としての成長につながるから何とか耐えてやろう」と

思っており組んでいます。

柴田 私の場合、仕事だけやっていたら、とつくにさじを投げていたと思います。仕事で嫌なことがあってもフットボールをやることで前向きに困難に立ち向かっていこうという気持ちになります。また同じ事業部だけでなく、仕事で関係する部署にもインパルスの仲間がいるので、仕事があるムードに行くことも多くあります。

インパルスの魅力を教えてください。

木下 社会人になるとチームメイトと会うのは土日だけというチームも多いと思いますが、インパルスの場合は週3日の練習以外でも社内やトレーニングルームで毎日のように顔を合わせます。その分チームの結束力が強いと思います。

モトウ 会社の敷地内に練習フィールドがあつて、ミーティングルーム、トレーニングルームもある。ここまで環境に恵まれたチームはそうはないと思います。新型コロナウイルスの影響で大変な状況下でも、活動を続けられたのは会社の応援があつてこそ。本当に感謝しています。

林 会社がインパルスの活動を社会人としての人間教育・人材育成の場と捉えて、私達がフットボールをするために必要な環境整備をしてくれるなど、活動を全面的に支援してくれていることです。創業者である松下幸之助さんの言葉に「物をつくる前に人をつくる」というのがありますが、まさに人を大事にしてくれる会社。仕事もフットボールも全力で取り組める環境が整っています。

インパルスは社会人チームとしてどんな理想を目指していますか？

柴田 野球少年の憧れであるメジャーリーグの名門・ヤンキースは規律に厳しく、選手自身もそのことに対して誇りを持っていると聞いたことがあります。インパルスも強さという面ではもちろん、行動・言動も含めて子どもたちから憧れられる存在でありたい。フットボールの魅力を発信し、フットボールの発展に貢献できるチームになりたいと思っています。

モトウ 日本のプロスポーツ文化は米国に比べて未成熟だと言われていますが、インパルスは日本の風土にマッチした究極のアマチュアチームだと思います。プロフェッショナルなマインドで仕事もフットボールも真剣に取り組む、引退後はインパルスでの経験を生かして仕事で活躍する。競技引退後のキャリア形成に悩むスポーツ選手が多い中で、インパルスの取り組みが日本の社会人スポーツのスタンダードとして浸透していけばいいなと思います。

林 スポーツ選手を社員として抱えることは、企業としてはハードルが高いことだと思います。だからこそ、スポーツでも仕事でもこれだけ活躍できるということを示したい。そうすれば、パナソニックと同じような企業チームが増えてくるのではないかと思います。

モトウ 今シーズンは残念ながら日本一という結果を出せませんでした。支えてくださる方々の為にも、今年の反省を糧にチーム一丸となって、また来年、日本一を目指して取り組んでいきます。